

Shalom「シャローム」

菊地 茂

私は昨年8月14日から22日まで、家内と知人5名で念願だったイスラエルを訪問しました。ヘブライ大学の前からエルサレム旧・新市街を眺望、「主はシオンからあなたを祝福される」(詩128:5)という聖書の箇所祝されて旅が始まりました。

「カイザリア」では、砂地の戦車競技場を子供のように裸足で歩き、山上の垂訓の教会からはガリラヤ湖畔の小さな丘に登りました。当時と変わらぬだろう風景を眺めながら、「キリストと同行二人(のつもり)」で降りてくると、感動のあまり体内から熱いものが込み上げてくるようでした。

日本人ガイドさんがかつて働いたという「キブツ」を訪ねると、当時バナナ畑で働いたというお仲間偶然出会い、彼がハーモニカを吹くやいなやガイドさんが踊りだすという嬉しいハプニングもありました。

サウロ王と彼の3人の息子たちがペ

リシテ軍に大敗し、町の城壁に釘付けにされたという「ベテシャン」にはBC5000年頃から住民が住んでいたと聞いて驚き、紀元前の水洗トイレに感動して座って記念撮影。「世界遺産のマサダ」に登ると、要塞にたてこもったユダヤ人とそれを包囲するローマ軍の悲劇の舞台には、焦がすような日差しが照っていました。千人のユダヤ人が2年にわたり籠城した際、生命線の水を、岩を螺旋状に削った導水路で水槽に集めた仕組みには、なるほど！と膝を打ちました。

行く先々の町で「シャローム・シャローム」と言っている様々なユダヤ人とハグするガイドさん(彼はクリスチャン)。その顔の広さと心の広さに驚きの連続。率直で本音しか語らない彼の大ファンになりました。

さて私は「行政書士」を生業にして

います。8年前に恩師が心病んだご家族の相談にこられ、それから心の障がい者(チャレンジド)の方々とお付き合いが始まりました。5年前に『NPO法人シャロームの会』を立ち上げ、現在25名ほどの方々の生活と就労支援をしています。「庇(ひさし)を貸して母屋を取られる」に近いほどNPOの活動に時間を

割いてしまい、事務所のスタッフからブイーンが出そうな時もあります。

2年前に地域に開かれた喫茶店「太陽とオリーブ」をオー

ブン。安心して利用していただける店づくりの為にボランティアさん・スタッフが日々の活動し訓練しています。私たちは『シャローム』を「あなたはそのまま素晴らしい」(病気であろうとなかろうと)、そして、「どんなときも大丈夫」とお互いを大切にしたい、励まし合うことばとして使っています。



スタッフたち(後列左端が筆者)

ところで、現在日本では、年間の自殺者3万余名、そして精神障がい者は300万人いると言われています。物質的にはかつてないほど豊かでありながら、多くの若者たちの心が平安のない空虚感に満たされています。イスラエルでは男女とも18歳になると兵役義務があり、軍服の若者の姿に自らの力で国を守っていく

という明確な意思を感じました。私たちは明快な目的を持つと、持てる力を十分に発揮できるといえるのかもしれません。

イスラエルに行くこと「聖書に色がつく」とよく聞きますが、私は3次元を超え4次元の聖書になったように感じています。日々の歩みの中で、自分の人生の目的を明確にし、内なる人(Being)を強くすることに努め、神(Being)との交わりの時間を大切にしながら大いに祝された喜びを、シャロームの人生観を、多くの方々にもお伝えしていければと願っています。